



JPF REPORT vol. 4

MONTHLY NEWS LETTER ABOUT JAPAN POLICY FRONTIER

特定非営利活動法人日本政策フロンティア

Contents

- 巻頭挨拶「皇孫殿下の誕生をお祝いする」 小田全宏
- Research Report「自民党総裁選の変化が首相公選制を近づける」 鈴木孝明
- Research Report「政権交代による日中間FTAの推進を」 三浦秀之
- Book Review「自壊する帝国」 雀部道子

特定非営利活動法人日本政策フロンティア

〒105-0001東京都港区虎ノ門3丁目10番5号6F

TEL:03-5777-5809 FAX:03-5777-5819 発行人：小田全宏 編集者：三浦秀之



「皇孫殿下ご誕生を お祝いする」

日本政策フロンティア理事長
小田全宏

この度の皇孫殿下のご誕生を心からお祝い申し上げます。

今回のご誕生は単に皇室にお子様がお生まれになったということではなく、日本の天皇制の根幹に関わるできごとであっただけに、国民の関心もただならぬものがありました。今年を始め、国会では皇室典範の改正論議がかまびすしく、いよいよ本題の議論にというところで、紀子様のご懐妊され、「女系天皇やむなし」という国会の論議は一気に転換をしたのです。よく「今までも女性天皇がいたではないか」という話がされますが、推古天皇や元明天皇などの女性天皇は、あくまでもピンチヒッターの女性天皇であり、すぐに男系天皇に戻っていたのです。「昔は側室制度があったので、男系天皇が存続できたのだ」という議論もありますが、歴史をひもときますと、男系天皇を維持するために、なみなみならぬ努力がなされていることがわかります。例えば、第25代武烈天皇には子供がいなかったために、9代前の仁徳天皇の弟の子孫を探し出してきて天皇に据えられたのです。真実のほどは定かではありませんが、見つかった時は、馬屋の番をしていた男の子だったのですから驚きです。

高崎経済大学の八木教授が訴えられるように神武天皇以来男系男子のY染色体が連続と続いているということが大切なことだという言説には、私はいささか違和感ありますが、日本が天皇制に対して男系を維持するために、非常な意志を持っていたことは間違いありません。そして、この男系男子を守るために明治期以降も沢山の宮家が存続していたのです。

しかし戦後昭和20年の11月にGHQが出した「皇室の財産上その他の特権廃止に関する指令」により秩父宮・高松宮・三笠宮といういわゆる天皇の兄弟としての三直宮家以外の11宮家は廃止されてしまったのです。この11宮家は伏見宮家に連なっています。伏見宮家は北朝時代の崇光天皇を血脈の祖としており、彼らは常に天皇家における「血のスペア」の役割をしていたのです。つまり天皇家において男系男子が誕生しない時には、天皇の位についたわけです。ちなみに現在の今上天皇はこの伏見

宮家から枝分かれた後花園天皇の系譜からつながっております。

この昭和20年の皇室離脱から各宮家は大変な困窮に直面しました。現在天皇の血を引いている宮家の中で存続しているのは、竹田家、賀陽(かが)家、東久邇家(ひがしくに)、久邇家の四つになってしまいました。しかしたとえ天皇の男系の血筋を引いているといっても、民間人として何十年も生きてきた人々を私たち国民が天皇として心服するとはとても思えません。とにかく男系男子を守れば天皇制が守れるというほど単純な話ではないのです。

また反対に女系を認めていったとしたら、愛子様が天皇になられ、ご結婚され、またお子様が誕生していけば、それはそれで一つの流れでしょうが、皇太子殿下でさえ、ご結婚に対しては非常なご苦労をされたことを思うと、あらゆる困難を越えて天皇家に入ろうという男子は中々いないかもしれません。そうしますと佳子様や眞子様のお子様がお誕生になるということも起こりえるわけで、これも感情的に国民が受け入れることは難しいといえましょう。つまり男系男子を守るという主張にも、また女系を認めるという意見にもどちらも大きな問題があり、まさに天皇制存続の危機であったわけです。

私は今年念頭の国会での皇室典範改正論議に対しては「なぜそんなに急ぐのか」という強い疑念があり、今回のように雅子妃殿下や紀子様に男子が誕生した時に取り返しがつかないことがあるということをお訴えてきました。しかし反対に雅子妃殿下に対するお世継ぎ誕生へのプレッシャーの同情やまた男女同権論あるいはヨーロッパの王室との対比の中から、「女系でも問題はない」ということが有識者懇談会でも主流になっていたのです。ところが、この有識者懇談会では、「男系を守るか」ということと「女系を容認するか」ということがゼロベースで話合われていたのではなくて、もとより女系容認ありきからスタートしたのですから偏向的な議論が行なわれていたのです。

国論が二分していることに対し、天皇陛下もひどく心を痛めておられたようで、秋篠宮家にも相当な覚

悟があつての第三子誕生だったようです。

これで私達が生きている間には、まず女系天皇が誕生することはありませんし(皇室典範が今後変更されない場合には)、またここ数十年は男系が守られることでしょう。しかし例え数十年後であっても、この問題はまた蒸し返されてくるはずです。私が危惧しますのは、男系であれ女系であれ、天皇に対する関心や信頼国民の中から消えうせた時には、どちらにしても天皇制が存続することは難しくなるだろうということです。

日本の歴史の中で2600年の長きにわたってその血脈を保ち続けてきた家柄は世界中何処を見渡しても天皇家しかありません。もちろん天皇家にも歴史上様々な悲劇が繰り返されましたが、しかし世界的な標準で考えれば、天皇家はまさに平和の象徴であり、かつてアインシュタインが日本に来た時に日本と天皇家に対し大いなる平和への期待の言葉を述べたのをみても日本の天皇制の原点がみてとれます。

みなさんもよくご存知だと思いますが、かつて第二次世界大戦が終結したときに昭和天皇が仰った言葉にマッカーサー元帥は驚愕しました。それは昭和天皇が「元帥、今回の戦争のすべての責任は私

にあります。どうぞ私を絞首刑にしてください。しかし今国民は飢えて苦しんでおります。どうぞ元帥わが国の国民を救ってください」と言った言葉でした。

このときの場面に対しマッカーサーは回顧録の中で「我神をみたり」と思ったと述べています。天皇の中に流れている帝王学の原点は、自分のことは考えず、ただ国民の安寧を願う無私の精神がその精髓にあるのです。

今日本の教育改革の中でも「日本の伝統精神を尊重し」という文言が入れられるといひます。伝統とは、お茶やお花をたしなむことばかりではないでしょう。また単に制度としての天皇制を保存することではないでしょう。そこに流れる平和の精神を未来永劫世界に届けていくことだと確信しています。今日本は大きな曲り角にきています。経済的な力の劣化のみならず、日本人としての豊かな精神性が薄れ、日々目を疑うような事件が頻発し、このままでは日本は戦争なくして滅んでしまうのではないかと、このたびの皇孫殿下の誕生が新しい日本を作る光になっていきますことを心から祈らずにはいられません。

「自民党総裁選の変化が首相公選制を近づける」

日本政策フロンティア研究員 鈴木孝明

いよいよ、次期自民党総裁(以下、総裁選)の誕生が間近になってきた。(2006/9/11現在)この5年間小泉純一郎氏(以下、小泉氏)は自民党総裁の座を揺るぎの無いものにしてきた。既に数多くのマスメディアで取り上げられている通り、小泉氏のこれまでの自民党総裁としての地位は国民の支持を基盤にしてきたことは間違えない。

あの2001年の総裁の時、予想では当時の自民党最大派閥の領袖である橋本元首相の再任が囁かれていた。しかし、田中真紀子氏と小泉氏の「自民党をぶっ壊す。」という思わぬ言葉に世論の風が動く結果になった。結果として総裁選は世論を大きく反映させる形として当初の予測とは異なる小泉氏の当選となった。

もともと、総裁選は派閥の力学が大きく影響してきた経緯がある。それは、1955年の保守大合同に端を発する。GHQの占領政策の下に行われた憲法制定、非軍事政策など背景にして、戦前の保守政党の系譜を受け継ぐ自由党と民主党が合併する形になった。当然、一つの党になったとはいえ元は違う勢力、派閥が出来るのは当然のことであった。

自民党は所謂、派閥政治に突入していくことになる。自民党は派閥を政策集団として、切磋琢磨する

ことでよりよい社会の実現を目指すことを標榜してきた。しかし、「三木おろし」・「40日抗争」など国民にとっては分かり難い権力闘争を繰り返るのである。

自民党は長らく与党の地位にあり、総裁が結果として首相指名を受けることが暗黙の了解である。よって、この総裁選が日本の首相を決めることになる。この派閥の力学によって首相を決めるという構造がうまく機能してきたのは概ね宮澤内閣までであった。というのも自民党政権を脅かす具体的な単一の党が存在せず、世論の支持とは別に自民党の党内運営が出来たからである。

この状況に終止符を打ったのが小沢一郎氏を始めとする自民党離党組であった。「2大政党制」を訴え「総選挙による政権交代」を訴え始めたからである。自民党を脅かす「保守勢力」、もしくは「ヨーロッパ型の社会主義政党」が誕生することになった場合、自民党の総裁選も国民の支持を受けたものでなければ、政権運営を揺るがすことになってしまう。

平成初期の政界再編も当初は派閥的な運営であったことは否めない。新生党などが自民党の海部俊樹氏を、自民党が社会党の村山富一氏を首班指名したことは、イデオロギーと問題も含むとはいえ、ま

だ派閥政治の延長であったと考える。

だが、民主党・自由党の自民党以外の勢力が次第に存在感を示す内に、「自民党議員にとって求められる総裁」から「国民にとって求められる総裁」を選ばなくてはならない状態になりつつあった。結局、国民の支持を受けることのできない総裁選は自民党議員の次期選挙への当落に響くことが非常に大きいからである。

このような状況を背景として小泉氏が自民党総裁

裁なったといえる。街角で演説し、自民党党员以外の人間に対しても指示を求める総裁選の様相は、少なくとも自民党総裁選が国民から直接的に選ばれる公選制に近づいてきたことを示す。

今、自民党の総裁選が進んでいる。総裁を選んだ後にすぐに総選挙で民意を問い、首班指名を行うことが実現可能な首相公選制構造へのステップアップにつながるのではないだろうか。

「政権交代による日中韓FTAの推進を」

日本政策フロンティア研究員 三浦秀之

2002年11月初旬にカンボジアの首都プノンペンで東南アジア諸国連合(ASEAN)首脳会議が開催された際、併せて域外国である日本、中国、韓国、そしてインドの首脳が招かれ、ASEANプラス1(ASEAN諸国と域外国1ヶ国との会合)、ASEANプラス3(ASEAN諸国と日本、中国、韓国の域外3ヶ国との会合)といった一連の首脳会議が開催された。ここでは、2001年の同じ時期の首脳会議で10年以内の締結が合意された中国とASEANの自由貿易協定(FTA)について、交渉の枠組が合意され、また、2002年1月のASEAN訪問時に小泉純一郎首相が提案した日・ASEAN包括的経済連携構想も実現に向けて進展がみられた。これらは、この首脳会議に向けて準備が進められてきており、ある意味で予想

された展開だった。

しかし、一連の会議で最も注目されたのは、日中韓首脳会議において、朱鎔基中国首相が提案した日中韓におけるFTAのフィージビリティ・スタディーだった。小泉首相は中国とのFTAは中長期的課題と考えていると応じ、それ以上の進展はみられなかった。しかし、このような提案が行われたということは、ただちに実現するものではないとはいえ、東アジア全体を束ねる経済統合を進めていくうえで、大きな意味を持つ。

小泉政権では日中韓の関係は政冷経熱といわれてきた。次政権はそれを克服し日中韓FTAを推進するべきである。

Book Review 「自壊する帝国」 佐藤 優著 新潮社

「ソ連崩壊の過程で、あの地に生きたロシア人、リトアニア人、ラトビア人などが発見した「国民的生命のうちに潜む偉大なるもの・高貴なるもの・堅実なるもの」から現下日本人が学びとっていけるものがたくさんあると私は考えている。私が見たもの、聞いたことを、可能な限り正確に記録したいと思う。序章より」

あの衝撃的ベストセラー「国家の罣」の佐藤氏の「国家の自縛」「国家の崩壊」と続いた著作を読んで、この人の凄さは、どこから来ているのかを知りたかった。やはりその声は多かったようである。これは、1987年～1995年、ロシア大使館勤務時代に、ソ連邦消滅という歴史的な大事件に直面した氏の回想録である。この時期に佐藤氏がソ連に遣わされたことは、天の配剤としか思えない。前著でも分かるように、並外れた記憶力の持主の佐藤氏は、出逢った人々との会話、議論の内容、そしてその時に饗した食事の内容まで詳細に記していて、まるで小説の世界に引きずり込まれているかのような感動がある。氏をソ連邦崩壊を目のあたりにする運命へと導いたサーシャとの出会い、その友人達、そして崩壊に導いた政治家達の姿が克明に描きだされていく。氏が自分には、オリジナルな知を生み出す能力はないが、その知を、別の形に変えて、別の人々に伝える能力なら少しはあると言うくだりがあるが、少しどころか、彼の情報流通力はとにかく凄い。しかし、それは佐藤氏の人間としての誠実さ、高潔さが基本にあることもこの本は教えてくれる。日本の崩壊の可能性を殆どの日本人は信じていないが、国家は突然に崩壊することはあるのだという。エリツィン政権初期の国務長官で、実質的ソ連邦崩壊の筋書者といわれるブルブリスは、著者に「ソ連帝国は自壊したんだよ。あのクーデター未遂事件は政治的チェルノブイリだったと」語った。ソ連邦の崩壊に日本の行く末を重ね合わせて、我々は何を学ぶべきなのか。まだその答えが具体的には見えてこない佐藤氏は言うが、序章で紹介されている、戦前に活躍した右翼思想家大川周明氏の言葉「国民的生命のうちに潜む偉大なるもの・高貴なるもの・堅実なるものを認識し、これを復興せしむること。簡潔に言えば、改造または革新とは、自国の善をもって、自国の悪を討つことでなければならぬ」に、一国民としての指針を示された思いがした。

(日本政策フロンティア事務局長 雀部道子)